

——特別展によせて——

金農筆墨竹図について

ここに紹介します竹の画二幅は、ともに清の中頃の人である金農の作であります。しかもその落款から、両図とも同じ年(乾隆15年・1750年)に描かれたことが判ります。左が四月で、右が十月のものです。同じ主題の絵を同一人物が同じ年に描いたということを頭において、これら二図を見ますと、その違いの大きいことに驚かされます。

先ず四月に描かれた竹ですが、全体から受ける感じに、柔かで暖かな感じがあります。竹の葉は濃墨で描かれたものと淡墨で描かれたものがあり、それらを薄墨のじみが被って、竹の葉の群れる様子と奥行きを感じられます。更によく見ますと、淡墨で描かれた葉や枝の下には、岱赭と思われる薄茶色が下塗りされています。それに、この竹は若竹なのでしょうか、葉がどれも短くて、それらが皆こちらを向いているのですから、一見もみじの葉のようです。こんなことからこの画の柔かで暖かな感じが生まれて来るのでしょうか。

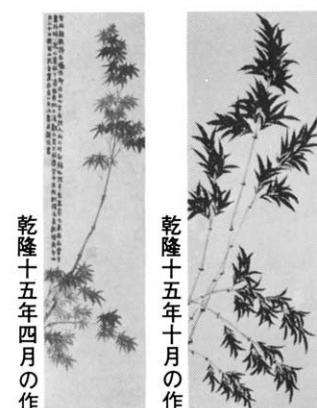
一方十月の竹ですが、この竹は重たく、なかなか強そうな感じがします。葉は一様に濃墨で塗られており、風にでも吹かれているかのように横を向いています。それでいて、にじみなど全くないために、白地に葉の姿が明確に現われていて、そこには何か強い意志を感じられます。

金農(1687~1763)は所謂揚州八怪の中心的人物であって、当時最も活気に満ち自由な雰囲気のあった都市、揚州に流寓した文化人の一人であります。ここに集まつた多くの画家達は、当時画壇を風靡していた南宗山水画の典型主義や粉本主義を嫌い、梅竹や花卉の画を自分の情熱の趣くままに、あくまでも自己流をもって描き出しました。「怪」という呼び名も、おそらくこういった型破りな制作態

度が人の目に強く印象づけられることによるのでしよう。このような気運の中から生まれた画からは、当然ある一定の様式を抽出することは出来ません。その画風は各人まちまちで、一人一党といった觀があります。

金農(字は寿門、号は冬心、稽留山民、昔耶居士、心出家盦粥飯僧)は、浙江省仁和の人で、若くから詩と書をよくした人であります、画を描きはじめたのは五十才を過ぎてからだと言われています。金農の書は全く独特な筆法をもち、現在でも冬心流の書と言われて尊ばれているくらい、一家の書風を確立していますが、素人画家に徹した画においては、竹、梅、馬、道耕人物と次々に自由なイメージを展開してゆきました。

これら二幅を通じて書が全く冬心のものであるのに反して、画が実に違って見えるということは、上記のことを示しているのではないでしょうか。金農は、画において、古画の型を脱していたにとどまらず、自己の型をも捨てようとしていたと言えましょうか。(早川賛多)



季刊 美のたより No.46

昭和54年4月1日

発行 大和文華館